

倭五王時代の関東

田中 巖（東京古田会）

はじめに

中国正史『宋書』に倭五王の朝貢記事が掲載されており、その年代は420～478年頃のこと。『梁書』倭伝にも武帝天監元年（502）倭王武を征東将軍に任命という記事があり、倭の五王時代は5世紀中頃から6世紀前半の時代となる。

埼玉県行田市の「さきたま古墳群」から出土した金錯銘鉄剣の115文字は「辛亥年、ワカタケル大王」と読まれ、「辛亥年」は471年あるいは531年、ワカタケルは通説で大和王朝の雄略ではないかと言われているが、古田先生は「関東に大王がいた証し」であると論じており、筆者もそれを支持している。

この倭五王の時代に、関東王朝があったと考えた場合、北関東、常陸、房総の様子はどうかだったのかを考えてみた。しかし、文献はほとんどないため、古墳、考古出土物、風土記、先行論文などを頼りに、推論を試みた。

1、関東王朝のあった頃の北関東

（1）さきたま古墳群は約140年も継続する大古墳群

さきたま古墳群では、鉄剣が発見された稲荷山古墳が注目されるが、現存する国内最大円墳の丸墓山や大形前方後円墳などのほかに、小円墳が約40基存在した。他にも明治陸軍省地図に残る大人塚（うしづか）前方後円墳なども存在した。また、古墳群のある台地と当時つながっていた東側台地上に白山古墳群約10基もあって、これらはさきたま古墳群とみなされ、合計約60基も築かれた大古墳群である。

さきたま古墳群一帯は、古墳時代に限れば古墳以外の遺構はまったく存在しない墓域・聖域として管理されていた様子で、その造営期間は約140年間とみられている。

1世紀を超えて造営された大古墳群は、国造系列の古墳群には見られない特徴であり、関東王朝の大王一族の墳墓と考えた方が良いと思われる（さきたま古墳群が武蔵国造一族墳墓であるとの見方もあるが、通説でも確定はしていない）。

（2）古墳群を含む周辺地図

北関東、南関東には、さきたま古墳群に先行した大古墳（群馬県の太田天神山、茨城県の舟塚山、千葉県の内裏塚古墳など）が4世紀～5世紀に築かれるが、さきたま古墳群造営開始とともに規模はそろって縮小し、小型化する。

関東の大王一族であるか、武蔵国造一族であるか、いずれにしても、北関東のこの地で、関東全体を睥睨した一大権力者たちが約100～140年間存続したのは歴史的事実である。

しかもこの地は、多数の鈴製品を出土している関東地方の中心地である。全国的に見てもこの地が最も濃厚な鈴製品出土地であり、鈴を祭祀道具・シンボルとする、政治的文化的の一

大中心地だったことは間違いないと言える。

鈴文明圏は、古田武彦著『古代は輝いていたⅡ』で詳説されており、同書記載の鈴文化圏地図（河出書房本引用）、天理参考館図録、安土城博物館図録などで確認できる。

（3）宮殿跡、豪族居館跡はあるか

さきたま古墳群の西1kmに隣接する高畑遺跡に「豪族の館跡」とみられる堀に囲まれた遺構が発見されている。また、北20kmの利根川を越えた地にある磯城宮（旧藤岡町大前神社）などもこの時期に想定される宮跡と思われる。

高畑遺跡の「豪族の館」復原はなされていない。

旧藤岡町（現栃木市藤岡）の大前神社は、拝殿が新築された明治12年に拝殿新築の石碑が建てられていて、「この地は其の先『磯城宮』と呼ばれていた」と明記されている。古田先生が『関東に大王あり』でも紹介しているとおりで（『関東に大王あり』が発表される1年前に、前沢輝政氏は有峰書店刊『下野の古代史』で大前神社の拝殿新築碑に「ここは磯城宮」が刻されていることを紹介しており地元でも知られた存在だった）。

なお、大前神社は明治3年4月、200m北の北前（現在の小字大前本郷）という隣地から移築されたことが、『藤岡町史』に書かれており、元の北前の地には「延喜式内大前神社古蹟」碑が建てられている。現在は小高い畑になっており、宮殿があっても不思議ではない地形である。

利根川と荒川の間位置するさきたま古墳群の所在するこの地は、恒常的な氾濫水域で、低地遺跡の発掘はほとんど行われていないが、微高地などのこれまでの発掘で、古墳時代前期に突然遺跡が確認される。畿内や東海地方西部系土器、北陸系土器などが多数出土する。尾張地方発祥のS字状台付甕をとまなう遺跡もつぎつぎ発見されているという。低地開拓を得意としていた尾張地方開拓者の末裔がこの地にも来ていたのではないかと見られている様である。

（4）関東王朝はなぜ消滅したか

関東王朝は、さきたま古墳群を100～140年造営し続けたあと、7世紀中頃（600年代中頃）なぜ衰退し、崩壊したのだろうか。その要因が何だったのかは今後の研究課題である。

①、火山爆発等の自然災害による疲弊が原因か。榛名山噴火は489～498年、525～550年の2回記録されている。

インドネシアの大爆発でスマトラ島とジャワ島が分断され世界的異常気象、寒冷化がおきたとされる西暦535年の大噴火か。日本書紀宣化天皇紀536年の詔に「食は天下の本である。黄金が満貫あっても、飢えをいやすことはできない。真珠が一千箱あっても、どうして凍えるのを救えようか」と自然災害・飢饉の様子をうかがわせる記載がある。

他に国内大地震としては、天武朝時代天武13(684)年の記録がある。

②、九州、畿内、東海等からの軍事的侵攻によるものか。上毛野氏と中央政権の結託で解体

されたのか。

③、武蔵国造の乱（安閑元年：534 とされる）がその要因なのか。など不明な点が多い。

（5）古墳群から見た関東王朝崩壊後の勢力図

①、6世紀後半～7世紀前後の群馬前橋地方。豪族の館跡が発見された三ツ寺I遺跡、その奥津城保渡田古墳群、総社古墳群、さらには観音山古墳などが営まれ、上毛野の中心地が確認出来る。5世紀中ころの太田市、足利市（栃木県）など県東南部から中央部へ中心地の移動が認められる。

総社古墳群は5世紀後半（遠見山古墳）から6世紀初頭（横穴石室の王山古墳）、その後7世紀以降総社二子山古墳、愛宕山古墳、7世紀後半の宝塔山古墳、蛇穴山古墳と続いている。7世紀の愛宕山古墳などの副葬品、ハニワなどから埋葬者は上毛野地域の支配の頂点に立つ地位に達したと見られる。さきたま古墳群と立場が入れ替わる現象と見ることも出来る。

②、武蔵地域でさきたま古墳群の後を継ぐような古墳群は造営されていない。

しかし、さきたま古墳群周辺の東～南1km～10kmに、6世紀後半～7世紀の間に、真名板高山古墳、若王子古墳、天王山塚古墳という100mを越える前方後円墳が築かれる。さらに7世紀初頭には小見真観寺古墳、7世紀中葉には武蔵最大規模の石室（16.7m）を持つ八幡山古墳が北方3kmの地に造営される。

さきたま古墳群を取り巻く様な位置に有り、権力が分散した、復権した、あるいは補強する勢力で再構築したとも見られる現象がおこる。

③、その後、律令時代に郡、郷、里の編成が行われるが、上野国では国造の本貫地群馬郡は13郷、下野国造の本貫地河内郡は11郷、常陸国造の本貫地茨城郡は18郷の上郡（上・中・下に区分された上郡）とされ、それぞれ国府と国分寺が置かれた。一方一大古墳群を形成した埼玉郡は5郷からなる下郡にされ、国府は南へ約50km離れた現在の府中市、国分寺は国分寺市に置かれ、武蔵国中心部は北端から南端近くへ移動されている。また郡衙にとりもなう寺院跡などは埼玉郡には確認されていない。

その一方、7世紀末から8世紀のころ、毛野国は国造国家としては上毛野・下毛野・那須国造エリアに分割され律令国家としては上野国・下野国2国に分割されるが、武蔵国は武蔵・秩父国造エリアに分割されるものの律令国家としては分割されず1国のまま武蔵国となる。武蔵国が細分化されなかった理由も不明である。

なお、房総は11国造、律令下では上総、下総、安房3国に分割。常陸は6国造、律令下では分割されない。

④、律令までに、関東王朝一族は、中央政権、上毛野政権によって解体された可能性が大きい。しかし、それはどのような経過を辿り、どのような結末となったのであろうか。関東王朝なる政権の存否、さきたま古墳群を100年余にわたって造営し続けた王朝解体顛末の解明が待たれるところである。

また、国造制度についての説明も行われなければならない。成務期に国造を定めた記事が記紀にある。しかし、各地の豪族が自らを「国王」とは言っても「国造」とは言わないであろうし、国造を、後の時代の「国司」「国守」の如く任命したかの様な表現となっているが、国造、県主、稲置などの制度化のプロセスは不明である。

2、関東王朝のあった頃の常陸

(1) 風土記の世界

和銅6年(713)に風土記選進の令がくだり、当時進行中の日本書紀編纂とともに進められた。

当時の中央政権にとって、これから列島全体を治世下に置く上で、常陸は最北辺の地であり、さらに北辺は理想郷であるべきとの思惑からか、常陸を「常世の国」・理想郷であると描かれている。古老からの伝聞という体裁をとりつつ、賛美している。

「土地肥えて広し、撃ちて取るべし」という(景行紀27年武内宿禰の)進言に呼応してか、主として鉄資源を求めたとみられるオオ氏の侵攻、那珂氏の侵攻などが行われた。それは古墳の状況などから4世紀～5世紀のことと思われる。

オオ氏の一族とされる建借間(タケカシマ)命、黒坂命などによる国栖や山の佐伯と呼ぶ先住民征服譚が語られ、また7世紀～8世紀当時の近現代史ともいえる香島郡の建郡譚も織り込まれている。

(2) 古墳の状況、侵攻の痕跡

4世紀～5世紀に舟塚山古墳、芦間山古墳、愛宕山古墳、梵天山古墳などをつくったエリア(後の6国造がおかれるエリア)ごとに開拓、侵攻は進み、小古墳群を継続的に造営していた。

そして、関東王朝・埼玉古墳群造営が継続される時代、6世紀末から7世紀にかけて虎塚古墳をはじめ装飾古墳が茨城・福島・宮城の太平洋沿岸部に築かれる。九州福岡・熊本を本貫地とする装飾古墳が東国太平洋沿いに多数分布するのは、古墳文化だけが伝播してきたわけではなく、人の移動に伴って伝播したものである。6世紀を中心に多数の移住者が、装飾古墳文化をもったリーダーに従って移住してきたものと考えられる。九州方面からの第二波、第三波の侵攻だった可能性が考えられる。

風土記、古墳などの状況から推断すると、九州からオオ氏一族が製鉄の地を求めて弥生末期300年頃侵入してきた。その後オオ氏一族の黒坂命が重ねて400年頃侵攻してきて、さらに、中臣氏、壬生氏などの侵攻が500年頃あったのではないか。装飾古墳だけでなく、九州の地名(那珂川、仲、鹿島など)が残るのも九州勢侵攻の一つの証拠と思われる(中臣氏の「中」も「那珂」の異字か)。

いくつかの集団の入植、建国で、常陸国には国造制の時代には6国造が並立した。

(3) ウナカミ国（海上国）の駆逐

オオ氏、黒坂命たちの侵攻によって、それまで栄えていた原住民のくにウナカミ国は南へ追いやられ、利根川を超えて千葉県方面へ移動したと考えられる（大杉神社市川宮司『アンバ神社社伝』）。

「石枕」を副葬する古墳の分布域が茨城県南部から千葉縣市原市付近までにみられ、アンバ信仰のよりどころとなる大杉神社の分布域とも重なっている。

その後の香島郡建郡で、常陸側に残っていたわずかなウナカミ国勢力（一里）も吸収されてしまう。

(4) 鹿島神宮設置と祭神の入替え・代位

常陸国風土記には、孝徳期大化5年（649）に常陸側に残っていた海上国の一里と那珂国（常陸）の五里をさいて神郡（香島郡）を置き、そこにあった天の大神社、坂戸社、沼尾社の3社を合わせ総称して「香島の天の大神」とよび、持統期には神戸を65戸としたとある。

オオ氏の侵入でナカ国がつくられ仲国造となり大生神社を残す。中臣氏らが再侵攻して「香島の天の大神」鹿島神宮が形作られて、大生神社は鹿島の奥宮とされる（要石、アラハバキ神などは温存されるが、おやがみの尊は門客神ともされない）。

主祭神である原始祭祀の祖先神（祖神尊おやがみのみこと）がオオ氏の祖先神（神八井耳命）に、その後中臣氏などによりタケミカツチ命に置換えられ、後に大和王朝の神統賦に組み込まれ、「神宮」名で呼称され東北エミシ攻略の拠点、九州派遣防人の集結点・出発地とされる。しかし、原住民の抵抗は根強かったと思われる。

(5) 鹿島・宇都宮は蝦夷攻略の最前線

千葉県側にある香取神宮の祭神は、鹿島の祭神タケミカツチ神を支える斎主（いわいぬし）とされるフツヌシ神で、一對の神といわれる（京都の上賀茂神社、下賀茂神社などの様な関係）。大河（現利根川。古代は鬼怒川）の兩岸にあって、共に「神宮」と呼ばれるが、実は、香取は鹿島神宮の後衛の逃げ城と考えられる。

栃木県宇都宮市街地から東7km、鬼怒川左岸の断崖に築城された「飛山城」がある。付属する8C～9Cの竪穴建物跡は水田耕作の集落とは考えられず、「のろし台」をあらわす「烽火家」銘墨書土器が発見されている。えみし勢力の南下に備えた内陸部の通信線と考えられる。

太平洋側では、利根川（当時は鬼怒川）をはさんだ香取神宮が、鹿島以北からの南下攻撃に対して退避する逃げ城だった可能性があり、宇都宮における内陸部の見張り台（のろし台）と対をなしている可能性が考えられる。

時代は下った平安時代末期（11世紀）、安倍貞任が戦死し弟宗任が降伏して前九年の役（1051～1062）が終了したとき、宗任の子を擁して数名の一族郎党が落ちのびた先が、茨城県下妻市にある現在の宗任神社といわれ、現在の宮司松本氏は一族を率いたリーダー（一説

には宗任)の子孫と言われている。遠く隔たった岩手県から落ちのびてきて、隠れ住む場所、かくまわれる安全地帯が宮城、福島、栃木県を越えてきた関東にまだあったのである(『東京古田会ニュース』No. 138、153号安彦克己稿参照)。

下野国となっていた宇都宮に中央政府側の見張りを目的にした山城が、まだ8C~9Cには必要だったのである。東の海岸どおりにある鹿島神宮も仲国造が支配した那珂川流域を南へ越えた位置にあるものの、8C時点では安全地帯ではなかったと考えられる。

(6) オオ氏とは何者か

神武の3人の皇子のうち、オオ氏の始祖とされる神八井耳は次男。腹違いの長兄タギシ耳の謀反を知り、三男の弟神沼河耳と2人で撃つことになるが、手足がふるえて矢を射れないでいる神八井耳に代わって神沼河耳が実行した。勇気ある弟がヤマト天皇家を継ぎ第2代の綏靖天皇になったと日本書紀は記している。本当は、臆病者とされた神八井耳が本流で九州王朝を継いだのではないか、その子孫がオオ氏であるという、書紀特有のヤマト王朝賛美物語ととれなくはない。

列島各地にオオ氏の侵攻を物語る様に「オオ地名」が数多く残るが、九州王朝系の侵攻を示しているのではないかと思われる。

3、関東王朝のあった頃の房総

(1) 「扶桑の國」と言われた房総

常陸国風土記にナカ国の五里と下総のウナカミ国の一里を割いて神郡をつくった話がある(600年頃か)。ウナカミ国は仲国造となる建借間命(タケカシマ命)、黒坂命などの侵攻を受けて、常陸から大半が押し出されて南の下総へ移動させられ、茨城側には残っていた一里があったと思われる。

その時の房総半島には、「扶桑の国」があって、「扶桑の国」の北部へウナカミ国がせり出す形で浸透して行く。

『梁書』によれば、扶桑国は499年に僧慧深が梁国の荊州に行き、こもごも語ったことが記録されたとされる国で、日本列島の南関東にあったと筆者は考えている(老岐一郎氏は葦書房刊『扶桑国は関西にあった』で関西にあったとしている。古田先生は房総半島にあった可能性を解かれている)。

『梁書』の記録によれば、扶桑国は「扶桑の木が多く、城郭はなく、文字があり、兵士はおらず戦争をしない。宋時代の大明2年(458)にケイヒン国(シルクロードの国)の僧5人が来て経典、仏教が伝えられ習俗も変わった」という様子を記している。

(2) 古墳時代の房総の様子

房総半島は、律令下で上総、下総、安房3国となるが、それ以前の国造時代は11国造がおかれていた。半島は低い分水嶺の房総丘陵を背骨にして、中小河川が左右の東京湾、太平

洋へ流れていて、それぞれの流域にできた扇状地を開拓した氏族が、それぞれの河川流域に小国を作っていた。古墳の造営も流域ごとに継続され、『千葉県歴史』によれば征服、被征服の痕跡を感じさせず、古墳時代終期まで継続するという。

その中で比較的大規模な古墳群としては、富津市の小糸川流域に展開する内裏塚古墳群、木更津市の小櫃川流域には金鈴塚古墳など僅かしか残っていないがかつては古墳群があった、市原市の養老川流域にある姉崎古墳群、九十九里には駄の塚、殿塚・姫塚などの一群、香取市の利根川沿いには三之分目古墳など、そして、成田市、栄町、印旛沼周辺に展開する公津原古墳群、龍角寺古墳群など「11国造エリア」ごとに古墳が展開している。

ウナカミ国が南進した頃、九十九里の栗山川沿いに武社国造グループが割込んで武社国をつくり、ウナカミ国は分断されて国造制下では上ウナカミ国、下ウナカミ国となった。同時期に印旛沼沿岸に分け入った印旛国造グループがあり、千葉市付近から北総方面が4～5国造エリアに分断され、房総は11国造時代となる(上ウナカミ国は千葉市から市原市付近、下ウナカミ国は銚子市から香取市付近に落ち着く)。

その後、国造制下の国は評(郡)に編成変えされ、上総国11郡、下総国11郡、安房国4郡に分けられた。

(3) 「扶桑の国」の消滅

律令下、上総・下総・安房3国に分けられる直前まで、房総半島は「扶桑の国」の名称が残っていたのではないかと思われる。天武朝のころ国郡の境を定めたとされるが、その時「上扶桑」「下扶桑」に分けられ、「上扶桑」→「上扶」→「上総」、「下扶桑」→「下扶」→「下総」に落ち着いたのではないかと推察される。

その痕跡が藤原京出土「荷札木簡」に証拠として残っている。

「郡評論争」に決着がついたとされる「上総国阿波評松里」木簡の国名は「上総」ではなく「上扶」と読み、「扶桑国」名の痕跡が残る貴重な史料ではないかと考える(2016年『東京古田会ニュース No. 167』拙稿「郡評論争木簡から「扶桑国」が見える」ご参照)。

(4) 理想郷として描かれた「扶桑の国」

房総半島一帯は、古来より、「扶桑の国」と呼ばれていた様子がある。古代中国には、扶桑国神話があり、蓬莱山・方丈・瀛州(えいしゅう)の三神山が東方の海上に浮かんでいて、扶桑の木が茂る国があるとされた。秦の始皇帝28年(BC219年)徐福と童男童女数千人を遣わし仙人を探し不老長寿の薬を求めさせた(『史記』始皇帝本紀)。

「扶桑の国」は古代中国では理想郷、あこがれの地とされていて、九州倭国との断続的な国交・通交が続いていた5世紀梁の時代、列島からの渡航者が、扶桑の木が多く繁る國からやって来て伝え、「扶桑の国」の存在が現実のものとして認識されたと思われる。

唐の時代、玄宗皇帝の許可で阿倍仲麻呂が帰国しようとした時、詩人で名高い王維は送別の詩で、仲麻呂の故郷を「扶桑の国」と呼び、仲麻呂は「蓬莱の郷」は遠いと応えており、

九州倭国以遠の地は、蓬莱山があり扶桑の木が茂る理想の国であるとファンタスティックに描かれ、自称していた可能性がある（当時阿倍仲麻呂の出身国は日本国が正式名称となっていた）。

房総半島一帯のエリアは、「扶桑の国」としての統一国家機能は弱く、後の11国造エリアによる連合体だった可能性があり、「城郭もなく、兵士はおらず戦争をしない国」だったかと思われる。扶桑の国は、二字好字令により、「扶桑」→「総」に置き換えられて、「上総」、「下総」とされ、扶桑の国の名前は消滅したのではないかと推論する。

（5）縄文時代以前から「オビシヤ」「三本足のカラス」の神事

関東地方に集中的に分布する「オビシヤ」行事の象徴とされる「三本足のカラス」。このマト（太陽または太陽の黒点とも）を弓矢または棒で突き刺す神事の神木は、蓬莱山に生える扶桑木とされ、縄文時代からの信仰か、さらにはもっと遡って、弓矢発明以前から行われていた神事を受け継いでいるかも知れない、と言われる。古田先生によると、縄文時代、古代中国堯（ぎょう）の皇帝が部下の義仲に命じて、日の出る所（国）へ行き、先進文明を学ばせたと『尚書』に書かれていると言う（1996年『多元11号』古田武彦氏新春講演会「矢印はどちらを指すか」参照）。

扶桑の国伝説は徐福以前からあったのであろう。

関東地方と隠岐の島の伝統神事として濃密に分布する「オビシヤ」「三本足のカラス」は、出雲熊野神社経由で紀州熊野へ伝播し、神武東進説話の八咫鳥とも習合して、日本サッカーのシンボルマークとなったのではないかとされている。

日本国の別称にもなっている「扶桑の国」、古代中国から理想郷のように羨望された「扶桑の国」名称が消滅したのは、「日本国」が律令国として正式にスタートしたこの時期だったかと思われる。

参考文献（古田武彦著作関係資料および文中表記資料は省略。）

- 1、藤岡町教育委員会『藤岡町史』昭和50年3月。
- 2、高橋一夫『鉄剣銘115文字の謎に迫る』新泉社。
- 3、寒川旭『地震の日本史』中公新書2007年11月。
- 4、ディビット・キーズ『西暦535年の大噴火』。
- 5、原島礼二『古代東国の風景』吉川弘文館。
- 6、吉野裕『風土記』平凡社ライブラリー。
- 7、山川出版社『県史シリーズ 8 茨城～14 神奈川』
- 8、柴田弘武『産鉄族オオ氏 新編東国の古代』崙書房。
- 9、千葉県『千葉県の歴史 通史編』平成19年3月。

（了）